



福島県立相馬農業高等学校 油菜ちゃんプロジェクトチーム

「復興ビジネス 2017」学生の部優秀賞獲得！JR 東日本賞もダブル受賞！

福島県立相馬農業高等学校 食品科学科 3年 門馬 未裕（もんま みゆ）

私たち相農油菜ちゃんプロジェクトチームは今年8月に、1学期中に試作を重ねていた油菜ちゃんドレッシングの姉妹商品として、「油菜マヨドレ」と「油菜ごまドレ」の試作風景やこれまでの実績を書類にまとめて、「新しい東北」復興ビジネスコンテストに応募しました。

1次の書類審査を見事に通過した私たちは、9月25日に仙台で行われた2次審査のプレゼンテーション審査に臨みました。審査員は、各業種の

専門家の先生方が6名という、大変緊張する状況でしたが、質疑応答でも「油菜ちゃん」への熱い思いをお話すると、審査員の方々も非常に感心してくださり、大変充実した発表になりました。

その結果・・・見事、学生では唯一「優秀賞」と「JR 東日本」の企業賞をダブルで受賞しました。11月8日に東京・丸の内で行われた表彰式では、ショートスピーチをして、吉野復興大臣と一緒に記念撮影（右写真）もしました。

11月24日には、今年 開発基金を援助していただいている「フクラム基金」の代表の方が、商品の開発風景の取材に来られました。この基金のおかげで、12月5日現在、私たちの手元に、「油菜マヨドレ」と「油菜ごまドレ」のサンプルが届いています。

これを今年度中に商品化することが、卒業までの私たちの夢です。



〒460-0012 名古屋市中区千代田5丁目11-33 STプラザ鶴舞5階B

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 高畑支店(店番号 297)

□ 座 番 号：普通 1682863

□ 座 名 義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵便 振 替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-228-6813（月・水・金 10:00 ～ 17:00）

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

南相馬便り

(神野 英樹)

9月中旬から、前任者(神谷俊尚さん)のあとを継ぎ、毎週、南相馬(とどけ鳥)と名古屋(自宅)を往復する日々が始まった。

今号から、このページを担当することになったので、「とどけ鳥」&「農地再生協」のトピックスを中心に、お伝えしようと思う。

* 急ピッチで進む「ナタネ搾油所」の建設！



ナタネの「搾油内作化」を目指し、南相馬インター近くの「信田沢仮設作業場」で、「搾油所」の

建設が始まった。10月28日から、土間の生コン打ち・給排水の配管工事・電気工事・搾油機の据え付けなどが急ピッチで進み、いよいよ12月12日からは、作業場内の間仕切り工事が始まる。これが完成すると、搾油工程・濾過工程・充填工程・包装工程の全体像(レイアウト)が見えて来る。乞うご期待！

* クリスマスカードを子ども達に！

今年も、日本全国からそしてウクライナから、たくさんのクリスマスカードが届く。いよいよ、サンタとトナカイに扮したボランティアたちが、幼稚園や保育園、そして今年は、小高産業技術高校や小高小学校の生徒たちにも届けたいと張り切っている。

* 第14期 測定隊が行く！

10月14日～15日&10月21日～22日に南相馬市(14回目)と浪江町(10回目)、そして11月18日には、富岡町(4回目)…と、秋の「放射線量率マップ」の測定作業が行われた。ともに、天候が心配される中(特に、10月21～22日は「超大型で非常に強い台風21号」の進路予報とにらめっこをしながら、1日早い帰還を余儀なくされるなど)、かなりハードな「測定隊」となった。しかし、参加したメンバーは、県外からの応援部隊・地元の案内部隊とも、経験豊富なベテランが揃い、平常心で完遂

してくださった。南相馬市と浪江町のマップは、既に刷り上がり、地元の皆さんの元へと配布が始まっている。測定結果の分析を一言で言えば「順調に下がっている(P5の池田氏の考察参照)」ということである。

* 苦戦を続けたナタネの秋蒔き！

悪天候が続く中、秋の種蒔き作業は大苦戦。一部蒔き切れなかった田畑は、来年3月の春蒔きでカバーすることになる。ただし今年度は、新たに小高地区や飯舘村の参加もあり、来年の春～初夏には「90ha」を超す菜の花畑が出現するのではないか…と、密かに期待している。

* 相次ぐ「展即」「商談会」「試食・求評会」！

「油菜ちゃん」「油菜マヨ」「油菜ドレ」「なのはなバーム」…、どの商品もジワジワと知名度が上がり、着実に売り上げを伸ばしている。もっとも、「再生協」の採算性については、まだまだ「今後の努力次第」であり、ますますの「拡販」が不可欠(皆様の応援、よろしく!)。「油菜ちゃん」の高級バージョンや「油菜ドレ」の新味バージョンなどの開発を進めつつ、「拡販大作戦」は続く。先日、「道の駅南相馬」で開催された「試食&求評会」では、「ためしてガッテン」でテレビ出演し一躍時の人となった、フランス料理店のオーナーシェフ 萩 春朋氏(いわき市在住)も講師として参加され、「油菜ちゃんシリーズ」を絶賛!「私の店には、他県からたくさんのお客さんが来るが、フクシマの商品を紹介する機会がなかった。是非、店頭において皆さんに薦めたい。『油菜マヨ』をフリーズドライして、パウダー状にしたら画期的な商品ができる!」…などなど、今後の協力を約束してくださった。

* 毎日が、目まぐるしく過ぎていく(会社の現役時代より忙しい)。これほどの仕事量を、難なくこなしていた神谷さんには、本当に頭の下がる思いである。感謝！

今後とも、悲喜こもごもの「南相馬便り」をお届けしていきたい。



クリスマスカードキャンペーンの進捗！！

(インターン生 山下 達矢)

みなさんこんにちは！！ インターン生の山下達矢です。進捗をご報告させていただきます。10月14日は、オアシス21で行われたワールドコラボフェスタにてブースを出展し、イベントに来た多くの方にカードを書かせていただきました。先月は、救援・中部の支援者のご協力でクリスマスカード会をさせていただき、東別院駅の近くのイーブルなごやで開催しました。また、毎年ご協力いただいている学童でも、子ども達に絵本を読み、クリスマスカードも書いてもらってきました！！

〈ワールドコラボフェスタで〉



今年も、ワールドコラボフェスタがオアシス21で開催され、たくさんの国際協力団体がブース出展していました。場所が場所なので、参加者もたくさん来場されており、「こんなにもたくさん国際協力に興味のある方がいるのか」と驚きでした。そして救援・中部も、クリスマスカードキャンペーンのためにブースを出展しました！！

設置したカードキャンペーンのコーナーには、ご高齢の方から、幼児までたくさんの方々に参加していただきました。友達といっしょに書いてくださったり1人で書いてくださったりと様々です。また、救援・中部とつながりのある方々も、応援のあいさつに来てくださいました。物販も少し売れました！！そしてカードの枚数は、何と82枚！！！雨だったので、これは素晴らしい結果だと思います。

〈イーブルなごやでのクリスマスカード会で〉

イーブルなごやでは、理事の河田さんと伊藤さんにお手伝いしていただき、開催しました。10数名参加してくださり、救援・中部のことや被災地のことを話し合いながら作りました。皆さん、はじめは「あんまり作ったことないからあー」や「絵が下手だからあー」とおっしゃっていましたが、何枚も書いていくと集中しはじめ、素晴らしいカードをたくさん創作してくださいました。親子で参加してくれた方もいました。



〈毎年ご協力いただく学童で〉

クリスマスカード作りに加え、救援・中部のことや被災するとどうなるのかといったことを、絵本を読みながら説明しました。「飽きちゃったらどうしよう」とか、「嫌われたらどうしようかなあ」とか思っていました、全く心配なくいい子たちばかりでしたし、話も真面目に聞いてくれました。子ども達は、低学年の子が多くとてもかわいかったです(笑)。しかし、やっぱり無邪気なところはあって、カード作りはとても楽しそうに書いてくれました。ほほえましいですね。学童では子ども達も30~40人来ていて、みんなとても元気に遊んでいました。職員の方は大変でしょうね。でも、とても癒されました!!! 当日は大学の後輩も手伝いに来てくれました。後輩ありがとう!!!

福井県知事が、運転停止中の大飯 3・4 号の再稼働に同意した。早ければ来年 1 月にも再稼働するという。その条件として、西川知事は「使用済み燃料の県外持ちだし」を関電と経産省に要求し、両者ともこれを呑んだ。以前から福井県は、使用済み燃料の県外移設を関電に要求し、関電はいずれ移転先（中間貯蔵場所）を確保すると言ってきたが、今もってその場所は提示出来ていない。原発再稼働を急ぐ政府も、来年 1 月には中間貯蔵場所を確保すると約束したが、果たして約束は守れるのか。この件は、今後全国の原発でも起こる問題を顕在化させた。

トイレのないマンション

原発は当初から「トイレのないマンション」と言われてきた。廃棄物処理方法が示されなかったからである。100 万 Kw の原発からは、1 年 4 か月毎の定期点検で約 100 トンの使用済み燃料が取り出され、使用済み燃料プールで 3～5 年間冷却した後に、再処理し高レベル廃棄物を地層処分する…というシナリオだった。しかし、青森県六ヶ所村の再処理工場は、建設開始から 24 年経った今も、運転の見通しは立たない。それに、高レベル廃棄物処分場も決まらない。その結果、各原発で使用済み燃料プールが満杯になりつつある。大飯原発の使用済み核燃料貯蔵プールの容量は 1,420 トンだが、既に 70% 詰まっている。全国の原発の使用済み燃料の総貯蔵容量 2 万トンのうち、1.5 万トンは詰まっている。福島原発事故後、現在動いているのは高浜 3・4 号など 5 基だけだが、今後再稼働が続けば、早晚、使用済み燃料プールは満杯になる。それで福井県知事は、県外持ち出しを再稼働の条件にした。国も関電も「県外の中間貯蔵施設」を約束したが、福井県以外のどこが引受けるといえるのか。結局、中間貯蔵施設は決まらないまま、再稼働を始めるのではないのか。

「中間貯蔵施設」の欺瞞

中間貯蔵施設は、最終処分引き延ばしの口実である。福島原発事故で発生した膨大な量

の剥離土壌のうち、10 万 Bq/Kg 以上の物は、大熊町と双葉町に「中間貯蔵施設」を作って保管し、30 年以内には他所に移動するという約束を、両町と国は交わした。その対価として国は、今後 3,010 億円支払うという。しかし、永久貯蔵所になることを恐れる住民の反対で、予定の 20% しか場所は確保出来ていない。最終処分場を示せず、「中間貯蔵」の空約束と金による、その場しのぎの姑息な政策である。実は、こうした欺瞞のルーツは、青森県六ヶ所村再処理工場だ。工場建設に当たり、国と日本原燃は青森県と約束を交わした。「全国から運び込まれる使用済み燃料を再処理し、高レベル廃棄物は 30～50 年間ここで冷却後、県外の最終処分場に移す」というものだが、実現の目途は立っていない。また、東電と日本原電は昨年、青森県むつ市に国内初の使用済み燃料用中間貯蔵施設を建設した。東電管内の使用済み燃料を運び込む。これも再処理までの中間貯蔵であり、年間 23 億円の交付金と固定資産税が支払われる。青森県知事は、六ヶ所村も含めた県内の使用済み燃料について、「再処理出来なければ全て元の原発に送り戻す」と明言している。「原発マンションのトイレは引き受けない」というのだ。これ以上、再稼働で使用済み燃料を増やしてはならない。

(2017 年 11 月 30 日 河田)

第14期(第28次・29次)空間線量率測定結果

(池田 光司)

福島第一原発事故後、半年毎に行われている空間線量率（空間の放射能の強さ）の測定が10月に行われました。後半の第29次は、台風が近づいて来る中、予定を早めながら測定して急いで帰ってくるという強行軍でした。測定にご協力いただいた方々、ありがとうございました。

さて、今回測定された各地域の空間線量率の状況を、かいつまんでご報告します。今回の測定結果を一言で示しますと

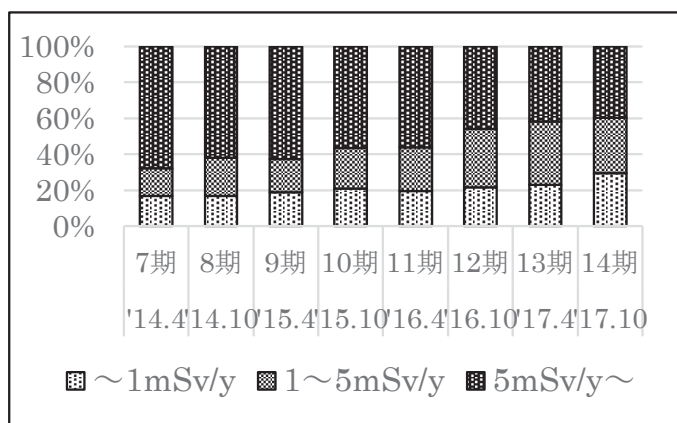
「空間線量率は、どの地域も順調に下がっている」

です。順調にという意味は、空間線量率の低下する大きさが、放射性セシウムの物理的半減期から計算される値と比べて、ほぼ等しいかそれ以上ということです。

南相馬市においては、上のグラフに示しましたように、年々空間線量率の低い地域が増えてきました。今回の測定では、ランクAA：空間線量率が0.15 μ Sv/h未満（年間追加外部被曝線量0.2mSv/y未満）のブロック（500m四方）が50%を超え、ランクA：0.30 μ Sv/h以下（年間追加外部被曝線量1mSv/y未満）のブロックを加えると90%を超えるまでになりました。南相馬市のマップを見ると、ほとんどが青色（濃い青がランクAA、薄い青がランクA）になっていることが確認できます。

浪江町においては、事故当時、放射能を含む雨雲が大柿ダム付近を通ったことから、大柿ダム付近を中心に、依然空間線量率の高い地域があります。したがって、南相馬市と比べると空間線量率の高いブロックの割合が多くなります。下のグラフは、年間追加外部被曝線量を

「1mSv/y未満(0.3 μ Sv/h以下)」「1～5mSv/y(0.30～1.07 μ Sv/h)」「5mSv/y以上(1.07 μ Sv/h以上)」の3つのランクに分け、全体のブロック数に対するそれぞれのランクのブロック数の割合を、



【浪江町における空間線量率の各ランクの割合推移】

年次を追って示したものです。グラフから、年を経るごとに、「5mSv/y以上」の線量の高いブロックの割合（棒グラフ上部の色が濃い部分）が減って、逆に「1mSv/y未満」の線量の低いブロックの割合（棒グラフ下部の色が薄い部分）が増えていることが分かります。「5mSv/y以上」の割合は、浪江町の山間部の測定を開始した7期（2014年4月）には68%だったものが、今回14期では40%にまで減っています。一方、「1mSv/y未満」の割合は、17%から30%に増えています。浪江町のマップを見ていただくと、海岸に近い地域は青い部分が増え、大柿ダムを中心とした山間地域は赤い部分が減っているのが確認できます。南相馬市と浪江町のマップ、および各地域の空間線量率が下がっている様子などの測定データ分析結果は、チェル救のホームページ

(<http://www.chernobyl-chubu-jp.org/sokutei-map.html>)に掲載されますので、ぜひご覧ください。

チェルノブイリ原発からの避難者、移住者との出会い

(原 富男)

10月10日から9日間、ウクライナを訪問しました。本来なら他のメンバーが行く予定でしたが、戸村さんと私の二人旅となりました。準備期間はなかったのですが、ウクライナ語のできる戸村さんと一緒に安心です。今回の旅は、ウクライナ講座などで文通を通して交流してきたボウクンさん（原発労働者の町プリピャチから避難した女性）や、事故処理作業者に会い、併せて、ナロジチ病院・幼稚園・移住者の村（ゼレムリヤ村）訪問・チェルノブイリ原発視察・チェルノブイリ博物館・プリピャチからキエフに避難した人たちでつくるゼムリヤキ訪問など、いつも通りの盛り沢山の日程でした。



特に今回は、ゼムリヤキ（キエフに避難）、ボウクンさん（ジトーミルに避難）、プリピャチセンター（ジトーミルに避難）の方との出会いが新鮮でした。いずれも、プリピャチからの避難・移住者であり、事故当時を経験されている方々です。

「だれが鳩に餌をやるの？ 帰って餌をやらなくちゃ」…事故当時の様子をリユーダ・ポリシャノウシクさんは語りました。

【事故当時家にいた私は、空気が変わったので窓を開けていました。人が「窓やバルコニーを閉めて！」と叫んでいました。人が原発の放射線量を測っていましたが、「どうしたの？」と聞いても、何も言いませんでした。私には16歳と8歳の子どもがいました。多くの消防車が、町を水や泡で洗っていました。母親達は何も知らず、子どもたちはその泡で遊んでいました。その後避難しましたが、8歳だった子どもは耳が聞こえなくなりました。子どもは父親に「なぜ原発を作ったの？」と言いました。その子は、プリピャチ市では「いつも鳩に餌をあげていたのに、だれが鳩に餌をやるの？ 帰って餌をやらなくちゃ」…と長い間心配していました。】

私のこれまでのウクライナ訪問は工事派遣が多く、人の話を丁寧に聞く機会が少なかったので、避難者の方々や移住者の村・チェルノブイリ原発・博物館など、いずれも新鮮な思いで見聞きすることができました。この思いを伝えるべく撮ってきた写真で、今、パワーポイントを作っています。ご利用ください。

ウクライナ代表派遣 2017 2017.10.10～10.19

(戸村 京子)

今回の訪問では、多くのチェルノブイリ被災者・団体の方と面会しました。10月10日の円卓会議を中心に報告します。

「母親たちの希望の光」プロジェクトの円卓会議

1996年から日本の母親と文通してこられたカテルリナ・ボウクンさんを始め、原発労働者の街プリピャチからの避難・移住者の女性6人と、日本の母親との手紙の交流について意見交換しました。

まず、チェルノブイリ原発で働いていた時のことや家族のこと、移住後の生活・仕事などを話していただきました。

そして、チェルノブイリでのチェルノブイリ／フクシマ講座「チェルノブイリとフクシマ～原発事故被災者と心をつなぐ交流会～」で、福島県南相馬市原町区・小高区、避難者のいる名古屋市での「チェルノブイリの母親たちの手紙集を読む会」の様子を紹介しました。

次に、福島から愛知へ避難された母親からウクライナの母親へ宛てた手紙（ウクライナ語訳）を、

「ホステージ基金」のドンチェヴァさんが代読。甲状腺がんへの恐れや子ども達への差別など、被災者・避難者の立場を周囲に隠している、フクシマの母親たちの置かれている状況や心情などが綴られています。すると、ウクライナの母親たちから「私たちも同じだったわ（ディーナさん）」と、子どもたちへの放射能被曝の心配や、避難に対する無理解や差別によって、周囲に避難していることを話せなかったことなど、口々に共感と同情が寄せられました。「我たちウクライナ人は、日本の広島・長崎の原爆の被害やフクシマの原発事故もあり、日本人の気持ちがわかります（カテルィナさん）」また、フクシマの母親からの今後の生き方の模索や質問に対して、「私たちの人生は事故前と事故後に分けられ、避難については、両親にすら気持ちを分かってもらえなかった（リユダさん）」、「生活は大変でも、生き続けて楽しめます（もう一人のリユダさん）」、「地球の大事な問題がわかり、価値観が変わりました（カテルィナさん）」など、31年前の避難の生々しい様子や、その後の日々をどう生き抜いてきたかが語られ、「フクシマの皆さん、希望を失わないで。人生は良くなり、続いていきます（リユダさん）」と、フクシマの被災者へのアドバイスをいただきました。



事故処理作業員・リクビダートル円卓会議

事故処理作業員（リクビダートル）との話し合いには、「チェルノブイリの消防士」基金、「リクビダートル」、「チェルノブイリ障害者協会」、「チェルノブイリの鐘」、「リクビダートル基金」、医療機関の「ジトミル成人病院」、「チェルノブイリ事故処理作業員の治療に特化したセクション」、州行政の被災者社会保障課などの 11 人に集まっていただきました。テレビ局・新聞社

の取材もあり、夕方のニュースで放映されました。

「ホステージ基金」・ドンチェヴァさんの進行で、まず原さんから福島原発事故の全体的な被害状況について報告、次に戸村が、チェル救の福島支援・津波被害等の写真など、支援活動のプレゼンテーションを行いました。各参加者との話し合いのポイントは以下の通りです。

- チェルノブイリ事故被災者に対する補償の現状について…行政担当者：「1991 年の『チェルノブイリ法』によって、リクビダートル・子どもの被災者に特権が与えられたが、1996 年に同『法』に変化があり、2014 年には子どもの特権が失われた。2015 年には放射能汚染地の 4 つのカテゴリーから第 4 ゾーンが無くなり、2016 年には第 2・第 3 ゾーンしか特権が与えられず、同『法』は機能していない。汚染地の幼稚園・学校で提供される食事代（20～30 グリブナ／日 1 グリブナ÷4 円）は無料だが、今は金銭的な支援はたいしてなく、被災者の特権はほとんどない」…保養の特権など『チェルノブイリ法』の補償は有名無実化しています。
- ジトミル州立成人病院副院長・ダニリョクさん：「事故後 30 年経って、チェルノブイリ関連の病気のための病院が開かれ、特別な治療が受けられるが、資金が足りず、治療の水準が低い」、「甲状腺がん・乳がん・胃がん・大腸がんが多発、食べ物による内部被ばくが問題」
- セクション主任カランチュクさん：「医療機器（超音波診断器・胃カメラ）が足りないので、検査・適切な治療ができない」
- 『リクビダートル』・コヴァルチュクさん：「医療費が少ないことが問題。事故から 30 年が過ぎて、病気が深刻になり、がん・心臓病・血液の病気が多い」
- 『チェルノブイリ障害者協会』・ヤリノフスキーさん：「今最も必要なのは健康、あるいは医療費」
- 『チェルノブイリの消防士』基金・チュマクさん：「31 年経って、多くの人が死亡した。医療センターで定期的な健康診断が行われているが、がんが多発し、ちゃんとした治療が必要」
- 『チェルノブイリの鐘』・アントニョクさん：「福島の人に伝えたいことは、協力しあえば何か変化が起きること」



測定隊が行く！

(NPO 法人がんばる福島 金子健司)

みなさん、こんにちは。NPO 法人がんばる福島は原発事故後、松村直登代表を先頭に、高い放射能汚染の中で町に残された犬や猫、ダチョウや牛たちを保護してきました。

私たちのふるさと富岡町は、福島県沿岸部の中腹部にある人口約 1 万 6 千人の小さな町です。

今年の 11 月 18 日に第 4 回放射線量測定が行われましたが、実施にあたり今回もご協力くださいました名古屋市の NPO 法人チェルノブイリ救援・中部のみなさん、本当にありがとうございました。心から感謝し厚く御礼申し上げます。

富岡町は、帰還困難区域を除き除染をほぼ終えた状況ですが、放射線量は年々減少しているものの測定器のアラームが鳴るような場所が多々あります。

今回の測定での体験ですが、測定後 1 台のダンプカーが僕の脇を通り過ぎていった時に、突然 2 台の測定器のアラームが鳴り響き、測定時 0.19 ミリシーベルトだった数値が、0.30 ミリシーベルトを超えて上がって行った時は本当に驚きました。

現在、町に建設された大型処理場には、たくさんの大型トラックや、ダンプカーにより、福島県各地に残された膨大な量の放射能汚染物が毎日運び込まれています。「国道沿いは数値が高い」と聞いていましたが、この現実を知り驚愕しました。復興拠点となる場所なので、このことには本当に憤りを感じます。除染した後に放射線量が上がるっておかしいし、スーパーや病院・復興住宅などがあるので、本当に憂慮しています。

町は、今後 5 年かけて帰還困難区域の除染を始めますが、まだまだ長くて遠い復興です。

原発事故から来春で丸 7 年ですが、私たちはこれからも全国のみなさんの協力を得ながら、富岡町の未来を信じ頑張っていきたいと思います。

チェルノブイリからのメッセージ！

あの!! ボウクンさんがやってきます

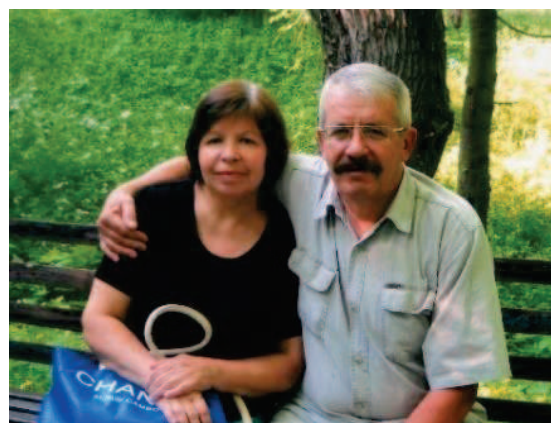
カティルナ・ボウクンさん。チェル救のリーフレット「知ってください」の表紙の少女・アヌーシカちゃんのお母さんです。今から 2 年前、ホステージ基金のドンチェヴァさんの呼びかけに応じ、プリピャチからの移住者ボウクンさんが、福島の被災者に一通の手紙を寄せてくれました。ご自身の 30 年間の体験をもとに福島の人たちに寄り添い、そして未来を示してくれる手紙でした。その手紙を今年 2 月、「チェルノブイリ／フクシマ講座 in 南相馬」でご紹介しました。

「あの手紙を書いたボウクンさんに会いたい」・・・それは、南相馬・小高の方々からの言葉でした。「前を向けない人たちに、心に響くお話をしてもらえたら」・・・そんな思いからです。

財政難のチェル救を案じ、とどけ鳥が助成金を申請、資金も目途がたち、ドンチェヴァさんもお一緒にお招きし講演会を開催することになったのです。講演会は、**南相馬市小高区(2/11)、長野県南箕輪村(2/15)、名古屋(2/17)**の 3 か所で行います。

講演会の詳細は、同封のちらしをご覧ください。

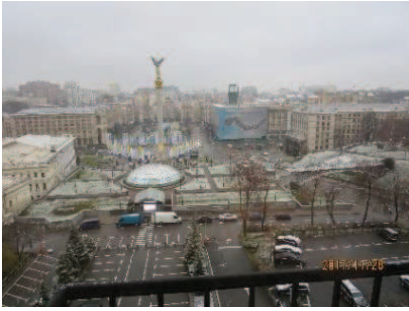
(市原)



〈お二人とも原発職員だった

ボウクンご夫妻〉

物事が複雑に絡み合った国、ウクライナ（フリーランス TVディレクター原 義和）



首都キエフの中心部をみんなで歩いている時、通訳のサーシャが「スリだから気をつけて」と叫びました。振り返ると数人の子どもがぞろぞろと脇へ逸れ、中年の女性がこわばった表情で目をそらしました。「ジプシーだろう」というのですが、彼らがロマ（「ジプシー」と呼ばれた移動民族）であるかどうかは定かではありません。でもキエフに根を下ろすロマがいて、多くの人びとに『ロマ＝スリ』と認識されていると思われます。複雑な社会事情は、沖縄から訪れた

身には、凍えるような寒さと喉を焼くウォッカの熱さを前に、訳が分からない状態でした。

キエフに、「ゼムリヤキ」というプリピャチからの強制避難者の互助団体があります。南相馬市小高から訪れた小林さん夫妻と、彼らの熱い語り合いが心に残りました。「避難者同士のつながりが困難を越える力になり、救いになった」とゼムリヤキの女性が話されました。福島でもそうしたつながりを大事にしてくださいとの訴えだったのですが、福島とウクライナの絆にも当てはまると思いました。

ジトーミル市の学校で、質問の機会を与えられました。「将来の夢は？」と尋ねたところ、3人の子どもが「戦争が早く終わってほしい」と答えたのです。ウクライナ東部では軍事衝突が度々起きていて、子どもたちはテレビなどで見聞きしているのでしょう。

原発事故当時、高濃度の汚染現場で働いた作業員たちにも、こんな質問をしてみました。「ロシアは嫌いですか？」。彼らは笑うしかないといった表情で、「好きになる理由は何もない」と答えました。でも、東部で同じ質問をしたら全く違う答えのはずです。

原発にしろ、戦争にしろ、人類的課題です。福島とウクライナがつながって、事故から何を学び、どんな未来をつくっていくべきなのか、どうすれば戦争をなくせるのか…共に語り合うことこそ、新しい明日を切り開いていく力だろうと思います。

暮らしを記憶する人が減ること

（東京大学大学院 地域デザイン研究室 博士課程 益邑 昭伸）

私が所属する研究室では、2014年から南相馬市小高区に通い、復興まちづくりのお手伝いをしております。当面の人口が少ない中で、小高に帰られた方、移住された方が安心して生活でき、かつて小高に住んでいた方も、小高となんらかの繋がりを持ち続けられるような地域づくりのお手伝いができればと思っています。そうしたご縁から、今回のスタディツアーをご紹介いただきました。「チェルノブイリの様子を自分の目で見たい」と以前から思っており、大変ありがたい機会でした。

現地で、様々な立場の方と対話する機会がありましたが、特に印象深かったのは、原発直近の先進都市プリピャチから首都キエフの団地に移住されている方々の自主的な組織「ゼムリヤキ」を訪問したことです。事故から31年が経ち、当時働き盛りだった彼らも60代後半を迎えていました。人生の大半を避難先で過ごすことになった彼らが故郷のことを語るのを聞くと、故郷での平和な暮らしの記憶はかなり昔のものになり、故郷と現在の暮らしが非常に縁遠いものなのだと感じました。いずれその地での暮らしを記憶する人が減ると、ウクライナの人々にとっても、チェルノブイリが事故と汚染と廃墟というだけの存在になり、「事故と汚染によって人命と暮らしが奪われたのだ」という本質が、伝わりづらくなるのかもしれませんが。実際、立入禁止区域を訪れても、若いガイドの解説以外には以前の暮らしや放射線量を知ることは難しく、前提知識や持参した線量計がなければ、単なる廃墟ツアーに近いものになってしまうでしょう。福島にとってはもう少し先の課題でしょうが、いかに事故を伝えていくか、考えさせられました。



2017年度上半期 財務諸表の注記

1. 重要な会計方針

計算書類の作成は、NPO法人会計基準(2010年7月20日 2011年11月20日一部改正 NPO法人会計基準協議会)による。

(1) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産は、法人税法の規定に基づいて定率法で償却をする。

(2) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税込経理方式による。

2. 事業費の内訳

事業費の区分は以下の通りです。

科目 (事業)	医療 機関 支援	粉 ミ ル ク 支 援	被 災 者 団 体 支 援	ク リ ス マ ス カ ー ド	業 務 委 託	通 信 誌 発 行	イ ベ ン ト 関 連	派 遣	福 島 原 発 被 災 支 援	啓 発
【経常収益】										
受取寄付金	66,765	71,500	383,315						1,115,000	
受取助成金										
事業収益							6,600		520,122	10,850
その他の収益										
経常収益 計	66,765	71,500	383,315	0	0	0	6,600	0	1,635,122	10,850
【事業費】										
1)人件費 給料手当 ・日当									246,000	
人件費計	0	0	0	0	0	0	0	0	246,000	0
2)その他経費										
業務委託費										
支援金	500,000		550,000							
印刷製本費			61,776	4,880		79,380			691,230	
会議費										
諸謝金							50,000			
旅費交通費							7,300	345,260	1,093,297	
通信費						36,800			2,547	
荷造運搬費						91,024	972		1,512	
消耗品費							141			
地代家賃									185,000	
水道光熱費										
賃借料							9,600			
仕入									159,998	
新聞図書費										
保険料										
諸会費									40,000	
支払手数料	3,571	1,904	9,695	108				1,512	6,530	
雑費							6,414		36,940	
為替差損										
その他経費計	503,571	1,904	621,471	4,988	0	207,204	74,427	346,772	2,217,054	0
事業費計	503,571	1,904	621,471	4,988	0	207,204	74,427	346,772	2,463,054	0
経常収益 - 事業費	▲ 436,806	69,596	▲ 238,156	▲ 4,988	0	▲ 207,204	▲ 67,827	▲ 346,772	▲ 827,932	10,850

2017年度上半期 (2017年4月1日～同年9月30日) の会計報告を監査した結果、異常なく正當に処理されていることを証明します。

2017年 11月15日 監査人 神野美知江

2017年度上半期 活動計算書

特定非営利活動法人チエルノブイリ救援・中部
(特定非営利活動に係る事業会計)

(単位: 円)
自 2017年 4月 1日 至 2017年 9月 30日

科目		金額	
【経常収益】			
1. 受取会費	正会員受取会費	96,000	
	賛助会員受取会費	273,000	369,000
2. 受取寄付金	ミルク	71,500	
	チエルノブイリ支援(医療機関)	66,765	
	チエルノブイリ支援(被災者団体)	383,315	
	福島原発被災支援	1,115,000	
	一般寄付	3,408,101	5,044,681
3. 事業収益	福島支援事業	520,122	
	イベント関連事業	6,600	
	啓発事業	10,850	537,572
4. その他の収益	受取利息	19	
	雑収益	2,000	2,019
経常収益 計			5,953,272
【経常費用】			
1. 事業費			
(1) 人件費	給料手当・日当	246,000	246,000
(2) その他経費	支援金	1,050,000	
	印刷製本費	837,266	
	諸謝金	50,000	
	旅費交通費	1,445,857	
	通信費	39,347	
	荷造運搬	93,508	
	消耗品費	141	
	地代家賃	185,000	
	賃借料	9,600	
	仕入	159,998	
	諸会費	40,000	
	支払手数料	23,320	
	雑費	43,354	3,977,391
事業費 計			4,223,391
2. 管理費			
(1) 人件費	給料手当	819,600	819,600
(2) その他経費	法定福利費	3,397	
	通信費	74,629	
	荷造運賃	8,078	
	水道光熱費	48,436	
	旅費交通費	1,340	
	消耗品費	88,642	
	印刷製本費	28,032	
	修繕費	12,800	
	地代家賃	388,800	
	保険料	7,730	
	租税公課	600	
	諸会費	40,000	
	支払手数料	20,142	
	雑費	2,000	724,626
管理費 計			1,544,226
経常費用 計			5,767,617
当期正味財産増減額			185,655
前期繰越正味財産額			4,672,168
次期繰越正味財産額			4,857,823

※その他の事業は実施していません。

2017年度は、助成金の新規獲得が1件もなく事業費の捻出をどうするのか、厳しい予算立てでスタートしました。上半期を終えてみると、収益合計の予算額約1千万円に対し約600万円の収益があり、上半期の収支は何とか黒字になりました。皆さまからのご寄附や会費収入によって事業活動が支えられていることの結果です。本当に心からお礼申し上げます。ウクライナ派遣やクリスマスカードキャンペーンなど、下半期に活動が集中する事業もあり、引き続き厳しい状態であることは変わりません。会計係として収益増につながる施策をあれこれ実践していきたいと思っています！残すところあと3か月...一層のご支援、ご協力のほどよろしくお願いします。(兼松 真梨子)

事務局便り

さすがに師走ともなると、ちょっと疲れが出てくる。特に今年は、未だ経験したことのない事態が事務所を席巻した！…というところオーバーだが、頼るべき「大樹」が年に何と2回もダウン。2人態勢が続いた。越年の溜まりにたまった金属？ 勤続？ 疲労が身体に出てしまったのだろうか。2回目のダウン時、期せずして、三井物産環境基金助成の最終報告書提出と重なった。いつもは「大樹」氏の仕事。最後まで諦めずに？ 氏の復帰を祈っていたが、（…動機が不純！）やっぱり天は、わが身に味方せず、「お前はたらけー！」とばかりに「大樹」氏をかばった。結果（…かいな）「大樹」氏無事復帰。—今、事務所はカード発送作業に追われている。作業しながらカードを拝見。心が和む。届けウクライナへ、届け南相馬へ。皆さまに心から感謝！（山盛）

<<緊急>> 年末カンパのお願いです！！

みなさま、どうかご支援ください。上半期を何とか黒字で乗り切りましたが、下半期に入り、ウクライナ派遣や南相馬・浪江の線量マップ作成などの活動に伴い、活動資金が底をつきかけています…。現状では155万円ほどの赤字で、活動資金の残りはたった300万円という本当に本当に厳しい状況です。まだこれから、チェルノブイリの被災者団体への医薬品代、子どもたちの粉ミルク代も送らなくてはなりません。あと3か月は何とか持つかもしれませんが、でも、、その先は！？ 助成金申請もなかなか決まりません。お願いばかりで申し訳ありませんが、どうか、私たちの活動を支えてください！！ みなさまの力が必要です。（兼松）

編集後記

- ☆東ティモールのフェアトレードコーヒーを販売する青柳珈琲を知った。おいしさと心意気が快く、「広めておきます！」と約束。愛知県日進市が拠点でWEBでも買えます。（佳）
- ☆Xmasカードを担当教員と生徒全員で作る。フクシマへの暖かい思いがジワジワと伝わる。「感謝の気持ち」と言われたけれど、ウクライナの人々の心はいつまでも暖かい。（美）
- ☆11月25日夕刻、南相馬市小高区のメインストリートで「イルミネーション点灯式」が行われ、帰還した住民の心に明りが灯った。私が毎週お世話になっている小高駅前の「双葉屋旅館」には、全国各地からボランティアの方々が集まる。そして、当旅館の女将とご主人の笑顔が彼らをもてなす。ここは、まさに復興拠点である。夕食のひとつときは、楽しい談笑があり、議論があり、ふと沈黙…。時にため息…。「オリンピック前に常磐線が全線開通するらしい!?!」「『スーパードラゴン』は小高駅にも停まるのかなあ？」「停まるよねっ！」…。『家族の分断』って言うけど、我が家は戻る戻らないで、毎日綱引きしてるんだ…。家族はいつも引き合っているんだよ。」街の明かりを消してはいけない。空家に明りが灯り、家族に本当の笑顔が戻るまで、復興支援は終わらない。
「《緊急》年末カンパのお願い！」よろしくお願いします。（J）

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エーブリント」

TEL・FAX (052) 871-9473



<JR 小高駅前の
「双葉屋旅館」>